
またいつか一緒に【第一話】

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またいつか一緒に【第一話】

【Nコード】

N1590T

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

【そして人はいなくなっちゃいました】へのご参加ありがとうございます。ございました。

それでは、リレー小説第二段を行いたいと思います。

今回もまた、勝手に始めてしまいました。拾って繋げてくださる著者の皆様大歓迎です。

よろしくお願いいたします。

(前書き)

今回は、設定事項を用意しました。以下の内容に添って、執筆お願いいたします。

リレー小説（第二弾） 設定・注意事項

- ★全40話
- ★一話2000文字以上
- ★登場人物数制限なし
- ★ファンタジー要素無し
- ★SF要素無し
- ★地の文は主人公視点
- ★重複執筆可
- ★ジャンルはその他
- ★執筆予約制廃止（予約を入れてくださる著者様を拒みはしません。ある程度の執筆予約が入ってから執筆開始はしません。執筆予約を入られた著者様に関しては、活動報告に揭示させていただきます）
- ★執筆著者様は、執筆前にご連絡ください
- ★執筆投稿後、必ず御一報ください
- ★あらすじは、前話までの要約を明記
- ★全ての物語を聖魔光闇がお気に入り登録します
- ★後書きに執筆著者様募集広告を添付

よろしくお願いいたします。

その事件は高校生活最後の旅行。そう卒業旅行の帰りに起こった。僕は友達四人と、小学生の頃に修学旅行で行った伊勢まで、卒業旅行に出掛けた。伊勢神宮や鳥羽水族館、志摩スペイン村で有意義に遊んだ僕達は、帰り気あいあいと電車を乗り継いで、帰宅していた。そうあの時までは、何も変わらない平和な生活だったんだ。

「なあ、智哉。タバコないか？」

僕に話掛けてきたのは、北口きたぐち 優僕ゆうぼくの一番の親友だ。

「お前、今日の旅行できっぱりタバコは止めるって断言してただろ！」

「そんな事言うなよ。禁断症状で気が狂いそうなんだよ」

「おいおい、優。そんな事言ったら、一生禁煙なんてできねえぞ」
優に説教じみた事を言っただけで呆れているのが、クラスの秀才、山中やまなか 勝俊かつとし。

「そんな事言っただけでよお！ 勝俊、テメエタバコを知らねえから、そんな悠長なこと言えんだよ！ なあ智哉、タバコ分けてくれよ」

僕の名は霧島きりしま 智哉ともや。こいつらのまとめ役みたいなものだ。

「悪いな、優。俺は本当に今回の旅行でタバコとはおさらばしたんだよ！ その証拠に、ほら！ タバコ、全て旅館に置いてきた」

僕は、かばんの中身とポケットの中身を隅々まで優に見せてやった。

「くそお！ 裏切り者があ！」

今にもキレそうな優の肩に、ポンと手を置き、

「まあ、諦めろや。良い機会じゃねえか」

そう言っただけで、澄ました顔で電車を待つのは、クールでポーカーフェイス。ニックネームが【能面】の異名をもつ只野ただの 三日月みかづき。

「三日月。お前タバコ持ってないか？」

優も相当諦めがわるい。周りの友達に掴み掛かつては、タバコを要求している。

「優！ うるさい！」

タバコタバコとうるさい優に突然キレたのが、口梨くちなし 来栖くるす。コイツは、状況判断及び、旅行プランの発案者で、僕達のある意味引率者だ。

「タバコお……。タバコねえのかよ！」

優が悲痛な声で訴えを続けていると、電車がやってきた。

「よし！ 帰るか！」

優の悲痛な叫びを余所に、来栖の掛け声と同時に、僕達はプラットフォームで電車の到着を待つ。

そんな時だった。一人の酔っ払いのオッサンが、僕達の背後に立ち、フラフラした足取りで電車を待っているようだった。

僕達は、話に夢中でそんなオッサンの事など気にしていなかったのだが、突然オッサンがよろけたと思うと、僕の背中に倒れ込んできた。

「オッサン何すんだよ！」

と振り向き様に叫んだが、その刹那、僕はプラットフォームに入ってきた電車に右半身がぶつかり、燃えるような痛みが全身を駆け巡った。

「智哉大丈夫か！？」

駆け寄ってきた優が突然足を止めた。

「なんだよ優！」

右半身の激痛に耐えながら、優に近付くと

「ひい！」

と声をあげて、優は尻餅をついたと思うと、そのまま後退りした。周りを見渡すと、勝俊も能面も青ざめた顔で僕の方を見詰め微動だにしない。

激痛の走る右半身に手をやると、僕自身気を失いそうになった。

『無い！ ぼ、僕の……。無い！ 無い！ ！』

僕の右腕は、電車との衝突により、粉碎し無くなっていたのだ。
た。

「うわああああ！」

僕は半狂乱の中、友人に助けを求めた。しかし、恐怖におののき、理性を失った友人達は、微動だにしなかった。そして僕は、そのまま出血多量の為か意識を失った。

気が付いたのは、真っ白な壁と天井に囲まれた窓もない個室の中だった。

何が起こったのか把握出来ないでいると、白衣をまとった医師らしき人物と、その傍らには、これまた白衣に身を包んだ看護師が立っていた。

「ようやく気が付いたようだね。君は、自殺未遂で走ってくる電車に身を投げ出し、運が良かったのか悪かったのか、一命を取り留めたのだよ」

『自殺未遂？』

話の内容に違和感を覚えたが、そこまで聞いて、あのプラットフォームでの出来事を思いだした。酔っ払いのオッサンが僕に体当たりをしてきて、僕は電車に接触したのだ。

「ば、僕は何故ここに……」

やっこの思いで口にした言葉はそれ以外になかった。

「君は、君の友人と名乗る少年達にかつがれてここにきたのだよ」

「優・来栖・勝俊・能面。ありがとう。……いや、自殺未遂って何だ？」

そう思ってベッドから降りようとしたが、上手く力が入らない。何とかベッドの端に辿り着き、立ち上がろうとした瞬間だった。

『ひ、膝に力が入らない……』

僕は、ベッドから滑り落ちると、そのまま床に倒れ込んだ。

「ああ。言い忘れていたが、君は両下肢の不随状態を引き起こして
いてね、立つ事どころか、歩く事すら今後出来ないよ」

医師は、僕の状態など知らないかの如く、淡々と説明をしていく。

言葉の意味を理解するのに、数分の時間を要したが、避けようのない現実には直面し、僕は大声で叫び続けていた。

「うわああああ！！　どうなってしまうんだよ僕の人生！　こんな事なら一層の事殺してくれ！」

涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにして、叫び続けた。声が枯れ、喉が張り裂けそうになっても、僕は叫ばずにはいられなかった。立つ事も歩く事も出来ず、右腕を失った僕に、もう生きる希望など存在しなかった。

そして、平和な日常から切り離された僕は、絶望感に支配された生活を送る事を余儀なくされたのだった。

数日後、優と来栖・勝俊・三日月が見舞にやってきた。アイツ等は

「ごめん」

「あの時は、気が動転してて」

「早く治して、卒業式にでろよ」

と勝手な事を言って、一輪の薔薇を花瓶にさしていった。

僕は、友人達が帰ると、さしたばかりの薔薇をゴミ箱にほうり込むと、電車に突き出したオッサンよりも、友達甲斐のない友人達に理不尽な恨みを感じていた。

『あの時、誰一人として助けくれようとしなかった。アイツ等をいつか見返してやる！』

僕の頭の中には、酔っ払いのオッサンへの恨みではなく、自分を見捨てた友人への恨みで溢れかえっていた。

『必ず復讐してやる！　必ず見返してやるんだ！』

怒りの矛先が間違いである事も気付かずに、長い時間を経過した後、僕は車椅子で移動する手段を覚え、卒業旅行で一緒だった四人への復讐に心を燃やしていた。

『絶対殺してやる！　俺と同じ苦しみをあじあわせてやる！』

そんな思いの中、僕は優・来栖、勝俊、三日月への復讐プランを練り続けていた。

その時既に、卒業式は終わり、僕の手元には、母の持ってきた卒業証書が一枚と、卒業アルバムが一冊あるだけだった。

(後書き)

これはリレー小説です。

リレー小説とは、複数の著者様による合同執筆（合作）の事をいいます。

前回同様、執筆して頂ける著者様は、事前にご一報、そして投稿後にご一報ください。

よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1590t/>

またいつか一緒に【第一話】

2011年5月10日14時10分発行